

【ねがいはましては】

平成30年11月26日

KYOWA SCHOOL

第337号

「孤独省」

別に仮想世界の政治形態を表したわけではありません。現実にある「省」なのです。私もこれを知ったときには驚きました。

国はイギリス、今年の1月17日に「孤独担当相」を設置しました。現在イギリスでは人口約6560万人。その中で孤独を感じている人が約900万人いるそうです。割合にして約14%、7人に1人が孤独を感じていることとなります。その中で1ヶ月以上親戚や友人と会話をしていないお年寄りが約20万人いるとのこと。そのような現実に対し、メイ首相は「あまりにも多くの人たちにとって、孤独は現代における悲しい現実だ。この課題に向き合い、お年寄り、介護者、愛する人を失った人、考えや経験を分かち合う相手がいない人たちが抱える孤独に対処するため行動したい」と、話しているそうです。

イギリスも日本同様、先進国のひとつです。2017年の各国高齢化率は、日本がトップ、イギリスは24位です。これを見てもひょっとしたら日本で孤独を感じている方の割合は、イギリスより多いかもしれません。日本政府は調べる必要があるかも……。

懐かしい昭和の風景、夕方になるとあちらこちらで人々が立ち話をしていたり、その近くでは子どもたちがゴムなわ、めんこ、ベーゴマ、かくれんぼ、ろうせき、駄菓子屋さんの前にも子どもたちがむらがっている。町全体が人々の生きる姿で賑わいを見せていました。「孤独」などという言葉は死語だったのかもしれませんが。

今では、子どもたちは学校が終わっても、そのまま部活で学校、低学年はそのまま学童保育でやはり学校、夕方の町には、いつもと変わらない静けさが流れています。公園へ行くと、確かに遊んでいる子どももいますが、ベンチに群がりゲームに勤しむ子どもも少なくありません。それも水曜日など、学校が早く終わったときなど……。町を歩く方々は、健康維持のためのウォーキングや犬の散歩など……。風景はいつの間にか大きく変化を遂げているようです。

昭和の子どもたちの人間関係で当たり前だったもの……年の差を乗り越えた自然な関係がありました。今ではそれは、先輩、後輩という格差をあらわにした表現へと変化しています。「〇〇にいちゃん、〇〇ねえちゃん」と呼べば、それで年の差を自然に解消した関係が保たれていました。年上はつねに年下の手本を心がけ、年下は年上を将来の自分の目標として敬っていました。

ここ（塾）で見られる子どもたちの触れあい方を見ていると、たった1年違っただけでも先輩は先輩、後輩は後輩、大きな精神的なかべをつくった言葉が飛び交います。学校での対応がそのままここへ持ち込まれます。

何かつねに心と心の間に「壁」が出来上がっているような、それがまた当たり前のような空気が蔓延します。同学年同士なら無邪気に成立するものが……残念な気持ちが私の中にあります。おそらく子どもたちも、学年差や年齢差を意識しない、自然体で触れ合いたいと願っていると思うのです。

常に順位や点数が目の前にちらつき、競争の渦の中で生活する子どもたちにとっては、目の前の友だちをどこまで信用していいのか、いつ裏切られるのか、ひやひやしながら学校生活を送っている割合は少なくはないと思われます。だとすれば、子どもたちも、孤独者の一員になります。うわべだけの関係が、さも友情なのだと思込んでいる子どもたちが多くいるのかもしれませんが。

もし子どもたちに「あなたは孤独ですか」と尋ねたら、どう答えを出してくるのでしょうか。テストや順位は、子どもたちの友情に鋭くメスを入れかねない残酷な現実です。受け止め方はそれぞれでしょうが、普段友人関係にある子が、いざテストとなると競争相手になってしまう現実、こころも体も成長過程にある子どもたちが、すべて孤独を一切感じることのない教育を受けることは当然の義務だと思います。そのような空間には「いじめ」は一切ないかもしれません。声には出さなくても、日々それを願いながら学校へ通い続ける子どもたちに私はエールを送りたいと思います。

同時に、お母様方の孤独も想像を絶するものがあると察しています。日々我が子の成績が気になり、悶々とする時間。かといって、誰に相談しようかと迷う日々。そうこうしているうちに時間は過ぎ、いつの間にか我が子の卒業を迎えていた。果たして私は我が子に親らしいことをしてあげたのかと、思い、悩む……。

それも孤独の現れかもしれません。親らしいこととは……。「……してあげる」ことではないと私は強く感じます。

昭和の子どもたちは、放課後のひとときを使って、「あんなふうなお兄ちゃんになってみたい」「あんなふうな大人になってみたい」と、家族や周りの人たちから多くの影響を受けてきました。理想は身の回りから受け取っていたのです。

であれば、まさに親が、一（いち）人（ひと）として、我が人生をおおいに生きることが一番ではないでしょうか。我が子の前で、まさに人生絶好調！いまが旬！人生を謳歌する姿を子に見せることが、最大のしてやれることだと思います。お金をかけて……とか、苦勞して……とか、これだけのことをしてやってんだから、我が子よそれに答えるなんていう「エゴ」はさっさとゴミ箱へ捨てるべきだと思います。子どもは孤独を望んではいません。

お子さんは望んでいます。「おおきくなったら、お父さんやお母さんみたいになりたい……」